巻頭言

総合文化研究所長　渡辺雅司

今からちょうど四〇年前のことである。わたしはアラスカ半島の北のブリストル湾で操業する蟹母船の上にいた。夏至だというのに朝から霙まじりの冷たい雨がふきつけていた。そんななかで前日の荷役作業中の事故でなくなった三人の作業員の葬式が行われていた。にわか作りの棺には日章旗が巻かれ、船団長が坊主がわりに経を読む。やりきれない気持ちで夕食のあと船橋（ブリッジ）に昇ったわたしは、あまりに感動的な光景に言葉を失った。それまでのどんよりした雲が切れ、水平線は黄金色に輝いていた。西の空に夕陽が沈もうとしていたのだ。陽が沈んでいる時間はおそろしいほど短い。天蓋に一瞬瑠璃色の光を残して闇に包まれる。すでに十一時を過ぎていた。だがそれから二時間も経っていないというのに、なんと今度は東の空が赤らみ始めるではないか。そして次の瞬間またしても瑠璃色の光が天蓋を走る。日の出である。そろそろ川崎船を下ろすウィンチの音が唸り出す。

それは太陽がまるで鬼ごっこをしているようだった。西から東へ移動がまさに瞬く間なのだ。このときわたしは思い知らされた。われわれは西と東をあまりに平面的なメルカトール図法によって、対極的に刷り込まれてはいなかったかと。地球を球体と意識するとき、北極圏に近いここアラスカでは西と東はすぐ隣なのだ。これをもっと北に行けば、方位そのものが消失し、ポールすなわち柱としての上下関係しか残らなかったはずである。

その後、ロシアを専門にし、西としての西欧をつねに意識しながら、東としてのアジアを切り捨てることができなかったわたしは、今回第一〇号を迎える「総合文化研究」の編集をまかされた時、昨年のテーマ「〈異郷〉と〈故郷〉のディアレクティク」を意識して「〈東〉と〈西〉のディアレクティク」というタイトルが即座に浮かんできた。外語大の総合文化研究所には二六の地域を専門にする研究者が集まっている。それぞれの地域から見た東と西とはどんな光景だろう。そう考えただけでうきうきしてくる。